

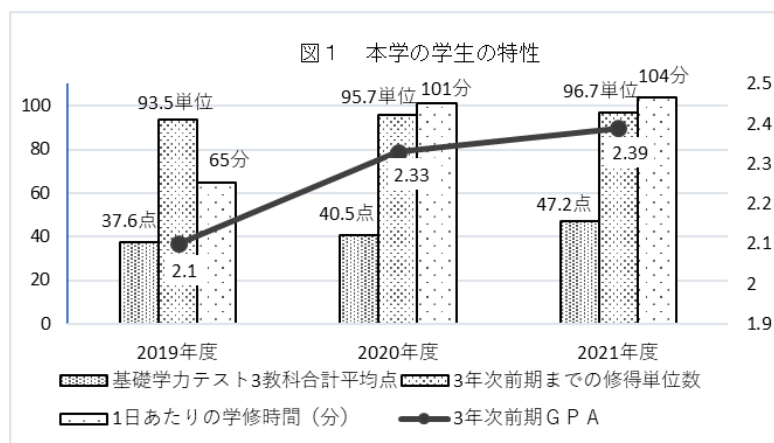
「汎用的能力」に関する成長実感調査についての実証的研究

本学では3年次の学生に対し、学部・学科毎の「専門的能力・技能」に関する成長実感調査に加え、汎用的能力の学修成果について、全学共通の設問により測定を行っています。学生は入学時と比較して自らの能力がどのように変化したかについて回答します。測定は2種類実施しています（「建学の精神」についての5観点5段階のルーブリック評価、および汎用的能力12項目についての5点尺度評価）。ここでは、2019年度から2021年度の全学測定平均値を振り返り、汎用的能力の学修成果について全体的傾向を明らかにし、学生の汎用的能力開発に関する「学習者本位の教育」を推進するための資料とします。

1. 本学の平均的學生像

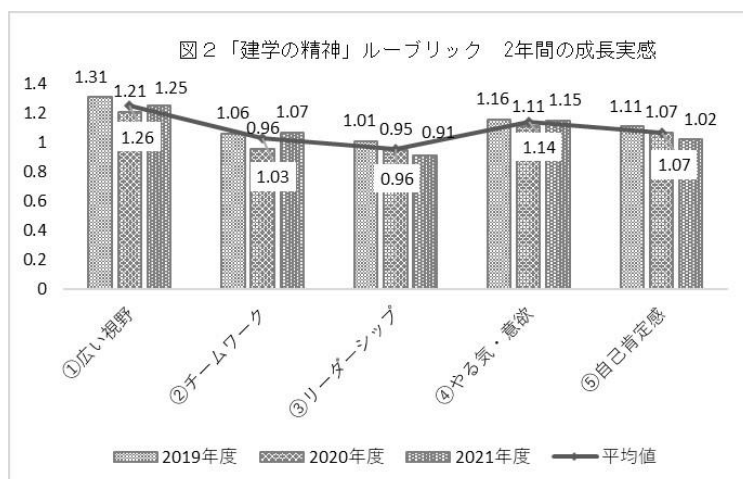
2019～2021年度における平均値をみると、汎用的能力の学修成果調査の対象である3年次の在籍者数は1,315名であり、回答者数705名、回収率は53.5%でした。

次に本学学生の特性について、過去3年間の推移を見ます（図1）。基礎学力テスト合計点は入学時点での学力を示し、GPAと修得単位数は3年次前期までの学修状況を示します。すべての測定値が年度を追うごとに上昇しています。すなわち、本学には年を追うごとに基礎学力の高い学生が入学する傾向にあり、より長時間自主学習に取り組むようになり、大学の学修内容をよりよく理解するようになってきているといえます。



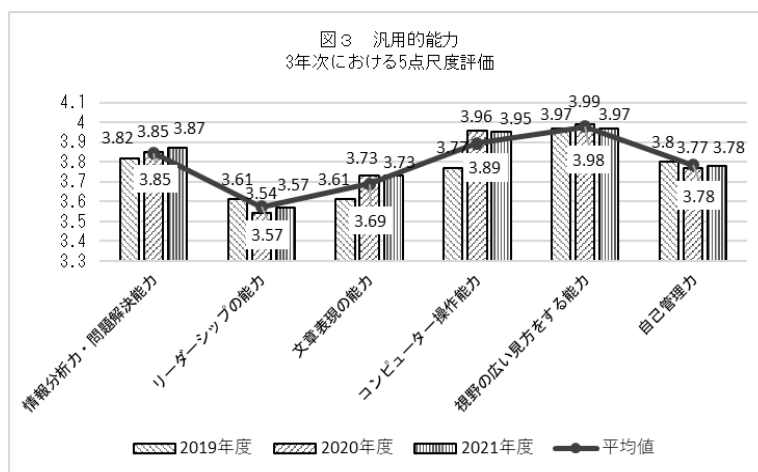
2. 「建学の精神」ルーブリックの3年間の測定結果について

「建学の精神」について、5観点5段階のルーブリック評価の過去3年間の測定結果を図2に示します。③リーダーシップと⑤自己肯定感については、3年間下がり続けています。コロナ禍でグループ活動やアルバイトの機会がほとんどなくなったため、リーダーシップの成長実感が小さかったと思われます。学生の基礎学力が年々高くなり、より長い時間自主学習に励んでいるにもかかわらず、自己肯定感の伸びには低下がみられます。大学生活において自己肯定感を高める出来事が少なくなっていることが伺われます。



3. 「汎用的能力」の3年間の測定結果

情報分析力など汎用的能力の過去3年間の測定結果によると、2019年度にリーダーシップ能力とならんで自己評価が最低であった文章表現能力の評価は2020年に大きく上昇し、2021年もその水準を維持しています（図3）。コロナ禍でレポートを書く機会が増え、口頭での応答ではなく、筆記による解答で評価される機会が増えたため、学生が真剣に文章作成に取り組んだ結果と推察されます。コロナ禍において、文章表現力の向上を実感できたのは貴重な収穫です。とはいえ、依然として他の指標と比較して低い水準にとどまっているため、ライティングスキルの指導の強化が求められます。また、パソコン操作能力の自己評価も、コロナ禍の2020年に大きく上昇し、2021年度も高い水準を維持しています。これもコロナ禍により、学生がパソコンを操作する機会が増えたためと思われる。



4. 学修者本位の教育への道標

個々の学生の可能性を最大限に伸長する教育、すなわち「学修者本位の教育」を実現する一つの方針として、「3年次の学生が、1年次と比べて伸びが弱いと感じている汎用的能力を伸ばす」というものが考えられます。本学ではリーダーシップ能力と文章表現力の伸びが弱いので、たと

えば授業において多人数の意見をまとめるグループ活動を取り入れたり、レポートを頻繁に書かせたりすることが有効ではないかと考えます。こうした取り組みにより、汎用的能力の向上を図ることが重要だといえます。

※日本教育情報学会第38回年会（2022年8月21日（日）於：十文字学園女子大学）において発表した資料をもとに作成。